幼児における意図推論の内容に参与者間の関係性が及ぼす影響

○宇土裕亮¹・橋瀬和秀²

(¹九州大学大学院人間環境学府・²九州大学大学院人間環境学研究院)

キーワード：意図推論，社会的関係，幼児

Intention inference based on social relationship of third persons in preschoolers.

Yusuke UTO¹, and Kazuhide HASHIYA²

(¹Graduate School of Human-Environment Studies, Kyushu Univ., ²Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu Univ.)

Key Words: Intention inference, Social relationship, Preschooler

目 的

直接観察できない種々の心的状態を自己や他者に帰属する認知的傾向は、”Theory of Mind”と呼ばれるが (Premack & Woodruff, 1978, 橋瀬, 2015)、この心的状態のひとつに意図が含まれる。ある行動を起こす際、行為者が何らかの意図をもっていることは確かに多いが、行動が必ずしも特定の意図から引き起こされるとも限らず、外面的には同一の行為が、まったく異なる意図から引き起こされる可能性も無視できない (Anscombe, 1957)。

例えば具体的には、行為者の意図推論は、参与者間の社会的な関係性によっても変化するが、このような推論は幼児期においてもなされているのだろうか。本研究では、提示する手がかり情報を文脈として実験的に操作することにより、同一の行為であっても、「善意」と「悪意」という二つの対照的な意図が推論しうる状況を設定した。意図推論の具体的な手がかり情報として、参与者間の関係性 (仲良し/ケンカ) を実験的に操作することで、幼児期においてどのような意図推論がなされるか、また、その発達の変化について検証した。

方 法

対象児は九州大学赤ちゃん研究員・ちびっこ研究員に登録している4・5歳児計40名であった。実験は、被験児保護者に事前承諾と協力を得、自宅で刺激となる動画を配布したDVD、またはYouTubeに投稿した動画を通して視聴してもらい、回答を保護者に記録・返送して頂く形でおこなった。各対象児は二日間に分割して計4つのイベントを視聴した。1イベントにつき内容確認質問4問と、自由回答での意図推論、強制2択による意図推論の計6問に回答を求めた。

各イベントには、二人のエージェントが登場し、被験児は1日あたり1条件2イベントを視聴した(「ケーキ」イベントと「にんじん」イベント)。条件操作として、エージェント間の社会的関係(二人はいつも仲良し/二人はいつもケンカ)の一方をイラストおよび言語で提示した。また両条件とも、手掛かり情報として、「善意・配慮」に結び付きやすい情報(ケーキを食べようとしていたエージェントは虫歯になりやすい、など)と、「悪意・意地悪」に結び付きやすい情報(ケーキを食べようとしていたエージェントはケーキが大好き、など)との二種類が付加された(提示順序はカウンターバランスを取った)。

イベントでは、一方のエージェントが他方に対し、「逸脱」的行動をおこなう(相手が食べようとしていたケーキを持って行ってしまう、など)。イベントを視聴した後、被験児に、なぜそのエージェントがそのような行動をとったのか質問をおこない、反応を記録した。

結 果

確認質問の成績について、年齢差は見られなかった($t(25) = 1.33, p = .20$)。多くの被験者がほとんどの確認質問に正

答できていたため、確認問題の正答数による分析からの除外はせず、強制2択による質問に無回答(4歳3名、5歳1名)および、自由回答と強制2択による意図推論間で明らかに一貫性がない被験児(4歳2名、5歳11名)は分析から除外した。

エージェントの行為が「善意」に起因するか「悪意」に起因するかについて強制2択を求めたところ、5歳児群において、仲良し条件のときに有意に「善意」に帰属した割合が多かった($t(9) = 2.71, p = .024, d = .86$)。一方で、4歳児の両条件、5歳児のケンカ条件においては有意な偏りは見られなかった(4歳児・仲良し条件： $t(12) = 1, p = .34, d = .28$, 4歳児・ケンカ条件： $t(12) = 1.76, p = .10, d = .49$, 5歳児・ケンカ条件： $t(9) = 1.15, p = .28, d = .36$)。

考 察

本研究は、5歳児が、三人称的な視点から他者間の関係性(仲良し)を考慮した上で、意図推論をおこなうことを示した。4歳児ではこのような傾向は見られなかった。Wimmer & Perner (1983)以降、他者の誤信念理解は4〜6歳ごろに明瞭になることが明らかになっているが、関係性を踏まえた意図推論と誤信念課題通過との関連については今後も検討する必要がある。5歳児「仲良し」条件においてのみ、(意図の不明瞭な)「逸脱」行為が「善意」に結びついたことについては、「仲良し」の方が理解されやすいなど、他者間の関係性の理解について差があったこと、本実験の状況下では「善意」に規範的側面があった可能性も考慮する必要があるが、「ケンカ」という関係性の設定が、内集団における一過的なものとみなされた可能性や、「悪意」を想定する意図解釈を表明することに対する規範的な規制が存在する可能性等も考慮する必要があるかも知れない。様々な関係性を考慮した上での三人称的な意図推論がどのような発達過程を辿るのかについては、更に幅広い年齢層で検討する必要がある。

引用文献

- Anscombe, G. E. M (1957) *Intention* 2nd ed. Harvard University Press.
(アンスコム, G. E. M. 菅豊彦(訳)(1984) *インテンション：実践知の考察* 産業図書)
橋瀬和秀(2015). こころというセオリー：あるいは、Theory of Mind ふたたび 木村大治(編著) 動物と出会うⅡ心と社会の生成 ナカニシヤ出版. pp77-83.
Premack, D., & Woodruff, G. (1978). Does the chimpanzee have a theory of mind? *The Behavioral and Brain Sciences*, **1**, 515-526
Wimmer, H., & Perner, J. (1983). Beliefs about beliefs: Representation and constraining function of wrong beliefs in young children's understanding of deception. *Cognition*, **13**, 102-128